北川政夫*: 東亜植物断想録 (31)**

Masao KITAGAWA: Notulae fractae ob floram Asiae orientalis (31)**

192) 満鮮産サンショウバラ類 一口にサンショウバラ類といっても，種類によって別の節 (section) に属している。Komarov が北朝鮮で発見したヒメサンショウバラ (*Rosa koreana* Komarov) はその原記相文や写生図によれば，小葉は数多く 7～15個あり，鋸歯は単鋸歯である。所が，中井猛之進博士の「朝鮮森林植物編」7の第14図を見ると，小葉は少く3～9個で，往々重鋸歯縁をなしている。また萼片の形状も異なっている。これは Juzepczuk が "Flora URSS" 10 (1963) で *R. ussuriensis* Juzepczuk と命名したものに外ならず，一応真のヒメサンショウバラとは別種と見なし，イヌサンショウバラと名づける。この種の方が前種より多い。これらの果実は紡錘形を呈する。次にアムール，ウスリー，満洲，朝鮮に分布するトウサンショウバラは従来欧洲産の *R. spinosissima* Linnaeus (=*R. pimpinellifolia* Linnaeus) に当てられて来たが，実際にはこれと全然別の種であり，1951年に発表された *R. gracilipes* Chrshanovski を起用すべきである。この類は球形の果実を結ぶ。

Rosa koreana Komarov in Act. Hort. Petr. **18**: 434 (1901): **22**: 530 t. 11 (1903); Nakai, Fl. Sylv. Kor. **7**: 41 (1918), pro p., excl. t. 14; Kitagawa, Lineam. Fl. Mansh. 271 (1939), pro p.

Nom. Jap. Hime-sansyôbara.

Distr. Manshuria, Korea bor. & Ussuri.

Rosa ussuriensis Juzepczuk in Fl. URSS **10**: 451, 637 (1941).

R. koreana sensu Nakai, l. c. 41 t. 14 (1918), pro p., quoad t. 14.

Nom. Jap. Inu-sansyôbara (nov.).

Distr. Manshuria, Korea & Ussuri.

Rosa gracilipes Chrshanovski in Not. Syst. Herb. Inst. Bot. Kom. Acad. Sci. URSS **14**: 188 (1951); Tolmatschew, Clav. Pl. Prim. & Amur. 230 t. 94 fig. 2 (1966).

R. pimpinellifolia sensu Komarov in Act. Hort. Petr. **22**: 534 (1903); Nakai, l. c. 39 t. 13 (1918); Kitagawa, l. c. 272 (1939).

---

* 横浜国立大学教育学部生物学教室. Institute of Biology, Faculty of Liberal Arts and Education, Yokohama National University, Tokiwadai 156, Hodogaya-ku, Yokohama.

** (30), 本誌, 48: 235-237 (1973).

Nom. Jap. Tô-sansyôbara.

Distr. Amur, Ussuri, Manshuria or. & Korea bor.

193) オオハナウドとホソバハナウド 私は最初オオハナウドの学名に *Heracleum dulce* Fischer を用い，後に北米産の *H. lanatum* Michaux の変種説に合意した。しかし，大井次三郎，Gorovoi その他の諸氏の意見に従い，*H. dulce* を採用したい。即ち，北米産のものとは，全体の毛の状態，果実の全形や分果の組織がかなり異っている。それから，日本本州中部に特産するホソバハナウドはオオハナウドと同様全体が壮大で，葉も大きく通常3個ごく稀に5個の小葉からなっている。この種の小葉の広さや分裂度には変化が多く，オオハナウドとの中間形もよく見出されるので，その変種と見る方が穏当であろう。普通のハナウドとは種的な相違点が見られる。

Heracleum dulce Fischer in Fischer, Meyer & Lallemant, Ind. Sem. Hort. Petr. **9** Suppl. 23 (1844) : in Linnaea **18** : 221 (1844) ; Kitagawa in Rep. Inst. Sci. Res. Manch. **2** : 274 (1938) ; Mandenova in Fl. URSS **17** : 236 (1951) ; Ohwi, Fl. Jap. ed. **1** : 865 (1953) : ed. **2** : 1003 (1965) ; Gorovoi, Umbell. Prim. & Amur. 210 fig. 143–144 (1966).

H. lanatum Michaux subsp. *asiaticum* Hiroe in Act. Phytot. & Geobot. **14** : 4 (1949).

H. lanatum Michaux var. *asiaticum* (Hiroe) Hara in Journ. Fac. Sci. Univ. Tokyo sect. 3 : **6**–2 : 92 (in adnota) (1952) : Enum. Pl. Jap. **3** : 310 (1954).

H. lanatum sensu Kitagawa in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo **5**–1 : 19 (1960), pro p.

Nom. Jap. Oh-hanaudo.

Distr. Japonia, Ochotk, Ussuri, Sachalin, Kuriles & Kamtschatka.

var. **akasimontanum** (Koidzumi) Kitagawa, comb. nov.

H. akasimontanum Koidzumi in Act. Phytot. & Geobot. **8** : 54 (1939).

H. lanatum Michaux subsp. *Moellendorffii* (Hance) Hara var. *akasimontanum* (Koidzumi) Hara, Enum. Pl. Jap., l. c. 310 (1954).

H. nipponicum Kitagawa var. *akasimontanum* (Koidzumi) Kitagawa in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, l. c. 21 (1960).

H. lanatum Michaux subsp. *akasimontanum* (Koidzumi) Kitamura in Act. Phytot. & Geobot. **20** : 196 (1962).

Nom. Jap. Hosoba-hanaudo.

Distr. Japonia centr.

194) ホソバタガネソウ これは以前本誌の44巻にタガネソウの一品種として発表したが，原記相文でも記したように，葉の幅のみならず，その他の部分にも差異点が

認められる。しかも，それらの形質には遺伝的固定性を具えているので，変種の格に上げることにした。

Carex siderosticta Hance in Journ. Linn. Soc. **13**: 89 (1873).

var. **stenophylla** (Kitagawa) Kitagawa, stat. nov.

C. siderosticta Hance f. *stenophylla* Kitagawa in Journ. Jap. Bot. **44**: 278 fig. 4 (1969).

Nom. Jap. Hosoba-taganesô, Izu-taganesô.

Distr. Japonia centr.

○馬医草紙の植物について (前川文夫)　Fumio MAEKAWA: Notes on the plants in Bai-no-Sôshi (1267)

馬医草紙は東京国立博物館にある重要文化財であるが，鎌倉時代の武士が大切にした馬の薬法を伝えた絵巻であり，これに 17 種の薬草を添えてあり，しかも実物を写生したと思われるほどよく描かれているし，本邦の植物を図譜として描がいたものとして最古のものとしても名高い。このものは，昭和 30 年 11 月 12–28 日に朝日新聞社が銀座の松屋で国宝重要文化財絵巻物名作展を催した際に展示されたし，また昨年10月 10 日から 11 月 24 日にわたって東京国立博物館が特別絵巻展を開催した際にもまた展示された。幸に私はその両回にわたって見ることができ，じつによく描かれた図に感心したのであって，姿勢といい容姿といい，今日に出しても劣らぬものさえあったのである。

ところでその 17 種については，いずれも右肩のところへ短冊型の框をとってそこに漢字で名を大きく書き，それに片仮名でルビをつけ，その名の下方に小さく別の漢字名を書いて，それにもたいてい片仮名でルビをつけている。漢字名としたのは法薬草のような漢名らしいものもあるが，仏前（ホトケノマヘ）のような名もまじっているからである。それは一二を除いて現今の名とは全く違っている。それを最初にはっきりさせたのは白井光太郎：日本博物学年表改訂増補版（1934）である。順々に示すと，

薬師草（ヤクシサウ），船裏（フナウラ）→フナバラサウ

法薬草（ホウヤクサウ），完灸草（シシヤキクサ），朽（クタシ）→オトギリサウ

車前草，於々波古→オオバコ

木草伝（モクソテン），茯苓（フクリヤウ）→ブクリヤウ

阿度者崎（アトハサキ），梅寄生（ウメノホヤ）→ヤドリギ

草王（クサノワウ），狼芽（コマツナギ）→キンミズヒキ

衣草（コロモクサ），唐苧（カラヲ）→カラムシ

仏前（ホトケノマヘ），青木香（シヤウモカウ）→オオグルマ

色々（イロイロ），毒散味（トクタミ）→ハコベ